

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第二十三主日 C 年

小西広志

2022 年 9 月 4 日

朗読箇所

第一朗読 知恵の書 9 章 13-18 節

第二朗読 フィレモンへの手紙 9b-10、12-17 節

福音朗読 ルカによる福音書 14 章 25-33 節

はじめに

東京教区の皆さんこんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は 2022 年 9 月 4 日、年間第二十三主日となっています。今日の三つの朗読をシノドスの教会の観点から読んで味わってまいりましょう。

知恵の書

第一朗読は『知恵の書』からです。『知恵の書』7-9 章は、ソロモン王が語るという形式で書き記されています。ソロモン王は知恵ある者でした。「イスラエルの人々はみな王が下したこの裁きを聞いて、王を畏れ敬った。正しい裁きを行うために、神の知恵が王のうちにあることを知ったからである」（列上 3 章 28 節）と『列王記上』にあります。ソロモン王は自分の長寿も求めず、富も求めず、敵のいのちも求めず、「正しい裁きを行う判断力」、すなわち、知恵を求めました（3 章 11 節）。紀元前一世紀に著された『知恵の書』は知恵の特性を語るところで、ソロモン王に語り手を託したのでしょう。

『知恵の書』9 章は知恵を求めるソロモンの祈りです。

フィレモンへの手紙

第二朗読は『フィレモンへの手紙』です。ローマで獄中にあったパウロが紀元 53 年頃に彼の協力者であるフィレモンと、その協力者であるアフィアとアルキボ、そしてフィレモンの家の教会に宛てて書いたものです。パウロはこの書簡の中でフィレモンの奴隷であったオネシモへの配慮を求めています。恐らくオネシモは役に立たない者としてフィレモンの家から出されました。しかし、パウロはもう一度オネシモを迎え入れてほ

しいと、この書簡で願っています。ちなみにオネシモはギリシア語でオネシモスで「役に立つ」という意味です。パウロはフィレモンとオネシモが和解するようにと願っています。

捨て去る、座る

福音朗読ですが、イエスさまの宣教活動ではいつもお弟子さんたちがイエスさまの近くにいました。特に使徒と呼ばれる 12 人のお弟子さんたちは、イエスさまと寝食を共にします。もちろん行動も共にします。師、つまり先生であるイエスさまと一緒に行動し、一緒に食事をしていくなかでイエスさまとお弟子さんたちとの関わり合いは深くなっていったと思います。お弟子さんたちにとって師であるイエスさまは、父のような存在となっていたことでしょう。そんな関わり合いのなかでイエスさまは、弟子としてのあるべき姿を伝えようとしています。今日の福音朗読の箇所はイエスさまの弟子となる条件をイエスさま自身が、自分と行動を共にしようとしている大勢の群衆に語りかけた箇所です。一時的に熱狂した群衆がイエスさまのエルサレムへ向かう旅に同行したのでしょうか。しかし、だんだん熱が冷め始め、旅がつまらなくなった人々もいたことでしょう。そんな人々に本当の弟子とは誰かを説きます。

26 節の「憎まないなら」はギリシア語でミセオーですが、「憎む」の他に「より少なく愛する」という意味もあります。そこから「選ばない、斥ける、無視する、軽視する」の意味が生まれます。そして、「捨て去る」という意味へと深まります。つまり、自分のいのちすらも捨て去らなければ弟子であり得ないのです。33 節の「自分の持ち物を一切捨てないならば」と呼応することになります。ですから、福音朗読の一つのキーワードは「捨て去る」です。

28 節と 31 節の「まず腰をすえて」に注目してください。フランシスコ会訳では「まず座って」です。つまり実際に腰をかけてという意味です。「まず」はギリシア語でプロトスです。これは「前に」を表すプロの最上級であるプロアトスと関連します。ですから「最初にすべきこととして、第一のことがらとして、なによりも優先して」という意味合いがあります。「座る」はギリシア語でカスィゾーです。これは一般的な動詞です。「まず腰をすえて」が二度登場しますから、福音朗読のもう一つのキーワードは「座る」となります。

まとめ

今日は少しわたしの体験を分かち合いたいと思います。

イタリアで学んでいた頃です。授業の合間の休憩時間に先生がバールに連れて行ってくれて、カフェとコルネットと呼ばれる甘いパンをご馳走してくれました。そんな習慣に慣れていないわたしは、休憩時間のカフェは少し気後れして、行きませんでした。ある日、先生がわたしに、バールには必ず来るようにと少し厳しく命じました。翌週の授業の休憩時間、仕方がないのでクラスみんなの後ろからコッソリとついて行きました。バールの隅っこでエスプレッソをすすっていると、クラスみんなが先生を囲んで生き生きと話しているのです。さっきまで死んだような目をしていた学生までもが水を得た魚のごとく喋っています。10 分間の休憩時間が終わって教室に戻ると、先生は休憩時間の雑談からキーワードを取りだして授業を展開し始めました。真面目にいるよりも先生と戯れていた方が得るものが多いという、日本では体験できない出来事でした。

今日の福音朗読では「捨て去る」と「まず座って」が大切な言葉となります。座るときは他に何かやるべきことをいったん中断し、座る。この当たり前のことを忘れてしまいます。効率を大切にする日本人は、一つのことに集中できません。それではダメです。座るときはすべてを捨て、中断して座るのです。

「捨て去る」も「まず座って」も同じです。わたしは、今日のたとえ話を、弟子になるためによくよく熟考して後悔しないようにしなければならないという意味で考えていました。このような理解は、福音のメッセージの本質に至っていないように思います。家庭、財産、いのちへの執着を全て捨て去り、イエスさまに従うことだけに集中しなさいという強い呼びかけが今日の福音朗読の本当のメッセージではないでしょうか。

本当の学びというのは自分のやりたいことをするのではなく、自分の思い込みを捨て去って、相手の話を聞くことから始まるのだという真実を、イタリアの先生は教えようとしてバールに来るようにと誘ってくれたんだと、二十年目にしてやっと分かったような気がします。

ところで、どの教会でも教会委員会のようなものが開催されていると思います。名前は違うかもしれませんが、教会の運営に携わるような集いはどこにもあります。想像してみてください。委員会が開かれている。誰かが遅れて入ってくる、そしたら気の利く奥さんが立ち上がってその人にお茶を出す。そのおかげで話し合いは中断されます。立ち上がってはダメなんです。今日の福音にあるように腰をすえて座って、話しあわれていることに集中しなくてはなりません。お茶を出すという一見、優しく見えるような習慣は捨て去らないと、新しいアイディアは生まれてきません。

「遅れてきたのはその人の責任です。お茶なんか出すと話が途切れますから、ほっときなさい」などと主任司祭が声を発すると嫌がられます。近頃は「共に歩む教会」じゃないか。シノドス性をわかっていない神父だ」と批判されます。なんとも生きにくい世の中です。

それではまた来週。